

「セメント樽の中の手紙」授業実践

—異なる〈読み〉を体験するための教材として— *

藤本 晃嗣 **

FUJIMOTO Akitsugu

概要

国語教材としてしばしば用いられる葉山善樹「セメント樽の中の手紙」は、プロレタリア文学としての評価と、小説としてのおもしろみという「文学性」の評価、この二つの評価をもとに教材としての意義が語られてきた。本稿は、「セメント樽の中の手紙」のこのような評価を利用し、プロレタリア文学という前提の有無で作品の解釈が変化することを学生に体験させることで、自らの「読む」という行為を意識化させることを目的とした授業の実践報告と考察である。

はじめに

葉山善樹「セメント樽の中の手紙」（初出「文芸戦線」大正15年1月¹⁾）を教材として扱う上で、作品の評価、つまり「セメント樽の中の手紙」がどのように読まれてきたのかが問題となる。その際、大きく二つの方向性が看取されるものと思われる。それは、例えば次のような評価に見られる。

この作品は、プロレタリア文学初期の名作として定評のあるものであり、その価値について、今ここで改めて述べるまでもなからう。また、数あるプロレタリア文学のなかで、文学教材としての評価も高い感動的な短編の一つである。そういった作品の位置づけからくる一種の安心感が、かえって教える側に災いし、作品への依存度を強める結果、学習者の感動の度合いを十分に考慮せず、性急に作品（プロレタリア文学）のもつ思想性を先行させてしまったのではないかという反省があった。（「セメント樽の中の手紙」の教材化」（日本文学）1976年12月）、傍線 藤本、以下同）

これは、「セメント樽の中の手紙」の教材論として、しばしば引用される川端俊英氏の論の冒頭にある、「セメント樽の中の手紙」の価値を論じた部分である。ここでは「セメント樽の中の手紙」が、「プロレタリア文学初期の

名作として定評のあるもの」であるというプロレタリア文学としての価値と、「文学教材としての評価も高い感動的な短編の一つ」という「文学性」を基調とした価値の二つの観点から評価されている。このような評価のあり方は、「セメント樽の中の手紙」について語られる際にしばしば見られるものである。このことは、例えば、筆者が授業で使用した指導書『精選国語総合 改訂版 指導書 [1]』（大修館書店、2017年4月、以下『指導書』）の冒頭にある次の部分からもうかがえる。

時代の違いを理解し、プロレタリア文学に触れるのは重要なことである。しかし、ここに描かれた苛酷な労働の実態や、そこから生まれる労働者の連帯は、なにも昔の話ではない。二〇〇〇年代でも「蟹工船」が話題になるなど、現代でも十分通用する側面をもっている。昔の話という形でなく、現在の自分とのかかわり、またこれからどのように生きていこうと考えたかといった視点を求めることも可能なのである。

加えてプロレタリア文学において珍しく内容も卓越といわれた表現や構成の巧みさなど、小説としてのおもしろさを十分に味わえる作品である。（中略）さらに与三の気持ちと重なる形で読者の心をゆさぶる力を、その手紙がもっていることである。本教材は、そのような物語（手紙）の力を知り、ひいては小説のおもしろさを存分に味わうことのできる好教材である。（「教材としての「セメント樽の中の手紙」（高根沢紀子担当、『指導書』336頁、以下「教材としての」）

* 原稿受理 平成29年12月26日

** 教養教育科

1 本稿における「セメント樽の中の手紙」本文の引用は、『精選国語総合 新訂版』（大修館書店、2017年4月）による。

改行前の前半部分は、この作品がプロレタリア文学であるということを前提にした作品理解である。一方後半部分、「表現や構成の巧みさなど、小説としてのおもしろさを十分に味わえる作品」という点は、必ずしもプロレタリア文学を前提にする必要がない作品理解と言える。つまり、その評価に「セメント樽の中の手紙」がプロレタリア文学ということを前提にしたものか否か、という点関わっている。

問題を整理するためにプロレタリア文学を前提にするこの意味を考える。これは、例えば次の評論が参考になるだろう。

プロレタリアの生活を描き、プロレタリアが表現を求めることは、それだけでは個人的な満足であって、プロレタリア階級の闘争目的を自覚した、完全に階級的な行為ではない。プロレタリア階級の闘争目的を自覚して始めて、それは階級のための芸術となる。即ち階級的意識によつて導かれて始めて、それは階級のための芸術となるのである。そしてここに始めて、プロレタリア文学運動が起るのであり、起つたのである。

プロレタリア文学運動は、それであるから、自然発生的なプロレタリアの文学にたいして、目的意識を植ゑつける運動であり、それによつて、プロレタリア階級の全階級的運動に参加する運動である。
(青野季吉「自然生長と目的意識」大正15年9月)

これは大正15年に発表され、プロレタリア文学のあり方に大きな影響を与えたとされる青野季吉の評論である。出されたのは「セメント樽の中の手紙」発表の後であり、「セメント樽の中の手紙」執筆に直接影響があったことを述べたいのではない。ここで問題にしたいのは、我々がある作品をプロレタリア文学として読むときのまなざしのあり方である。青野の評論は作者について述べたものと思われるが、作品の読み方を考える上でも示唆的である。プロレタリア文学としてその作品が読まれるということは、青野の述べるような「プロレタリア階級の闘争目的を自覚して」、「階級的意識によつて導かれて」という読み方がされること、つまり作品が「階級意識」との関わりで読まれることを意味する。それは、作品を「苛酷な労働の実態や、そこから生まれる労働者の連帯」（教材としての）を中心にして読むまなざしであり、より踏み込んで述べるならば、文学作品をそのような意識を強化するための一つの「手段」として捉えることを意味する。一方、「小説としてのおもしろさを十分に

味わえる作品」（同）として読むなら、プロレタリア文学ということ前提にする必要はない。言わば文学作品それ自体が「目的」となる。

この点はそのまま「セメント樽の中の手紙」の教材としての扱いに関わる。それは〈読み〉の力点をどこにおくかを変化させるからである。前者の代表的な見解として川端俊英氏の論を、後者の代表的な見解として『指導書』の論を並べる。

やり場のない思いを手紙に書くしかなかった女工ではあったが、この女工の訴えかけは、同じような思いのなかで酒にひたるほかなかった与三にとっては大きな励ましとなり、自分の苦しみも憤りも女工と共通するものであるという認識に立ったとき、やがてそこから連帯が広がっていくという労働者の可能性を、この作品は秘めている。そのことは同時に、この作品に接した学習者の青年としての可能性を開発し、展望を開かせる力にもつながっていく。

学習者に労働の経験がないのなら、また、いわゆる差別と選別の教育体制のなかで、連帯感に乏しく、疎外作用によって人間性が歪められているなら、なおさらのこと、この作品の教材としての価値もますます大きくならざるをえない。女工と与三に象徴される労働者の現実から、ぜひとも学習者に、人間解放の声を聞きとらせたい。（川端俊英「セメント樽の中の手紙」の教材代）

この手紙の中では女工の愛は本物なのであり、少なくともそのように読み手には捕らえられるものである。「セメント樽の中の手紙」にはまさにそのような〈手紙〉＝〈おとぎばなし〉の力、〈虚構の力〉²こそが読まれるべきなのだ。（中略）

「セメント樽の中の手紙」は、女工の恋人への愛を通して、労働者の連帯が求められ、それは〈手紙〉（虚構）の力によってささえられている。〈手紙〉は事実であるか虚構であるかに拘わらず、現実に影響を及ぼすものであり、それは〈手紙〉がとてもよく書けているからにはほかならない。たとえ〈手紙〉の内容が本当のことであったとしても、人を動かさない場合もあるのだ。

国語の中でもっとも必要な言葉の力を学ばせるために有効な教材として「セメント樽の中の手紙」はある

² 引用元の原文には〈虚構の力〉という言葉が原善氏の文章からの引用であるということを示す注意書きがある。

のだ。「解説 〈おとぎばなし〉の力」(高根沢紀子担当、『指導書』354 - 355 頁、以下「解説」)

前者のような〈読み〉の立場に立つとき、例えば作品に「連帯が広がっていくという労働者の可能性」を読みとるならば、この作品をプロレタリア文学とする前提を外すことはできない。なぜなら与三の状況や女工の悲劇に単なる現状への不満や悲しさ以上のもの、階級的な問題を読み取ることが不可欠だからだ。後半の「人間解放の声」についても、例えば女工の恋人の事故を偶然のものとしないうような、「疎外作用によって人間性が歪められている」という観点、つまり人間性を抑圧する社会構造という認識が不可欠である。

一方、後者の立場に立つならば、階級的な問題意識は必要ない。「労働者の連帯が求められ」とはあるが、手紙から「現実に影響を及ぼすもの」という「言葉の力」を読みとらせるのであれば、別のメッセージを受け取ったとしても問題ない。問われるのは、人を動かすか否かであるからだ。後で検討するが、実際に授業において学生は女工の手紙から別の思いを読み取っていた。つまり、この作品をプロレタリア文学として読まなくても、このようなねらいは達成可能なのである。

さて、なぜこのような点を問題にしたかという点、「セメント樽の中の手紙」を教室で読む学生にとって、プロレタリア文学として読むこと、「階級意識」との関わりで読むことに果たして自明の価値があるかと疑問に感じたためである。多くの場合「国語総合」に掲載される「セメント樽の中の手紙」が学習されるのは、高専(高校)1年生の段階である。一部のアルバイト経験を除いて、実際問題としてほとんど労働したことのない学生が、いくら2000年代後半に小林多喜二「蟹工船」がブームになったとは言え、「現代でも十分通用する側面」(「教材としての」)を実感として感じるだろうか。ちなみに今回授業をした際、本作品を初読段階で労働者の社会問題という観点から捉えたものはいなかった。また、プロレタリア文学として教えた上でも、過去の話と考えていたものが数多くいた。つまり、もしこの作品をプロレタリア文学としてのみ評価し、教室で授業するならば、現在においてその意味は相当薄れてしまっている可能性があるといこうことである³。

³ もちろん学生が将来において意味を再認識する可能性はある。また、文学と社会の関わりという観点は、戦争文学や原爆文学など、きわめて重要なテーマであり、その観点から扱うことも考えられる。

一方で、「小説としてのおもしろさ」(「教材としての」)を味わうことをねらいとするならばそのような問題は回避される。事実、ほとんどの学生がこの小説を興味深く読んでおり、今年発行された『指導書』が、こちらに力点を置くのもある意味で当然のことと言える。しかし、プロレタリア文学ということ抜きにすると、そこうまく読みとれない箇所がでないだろうか。例えば女工が「労働者」とこだわり続けること、「切れ」をあげること、そして松戸与三の境遇と女工の手紙とのつながりが見えにくくなる。

もちろん、両者は両立しないものではない。プロレタリア文学として教えることで細部を押さえつつ、「小説としてのおもしろさ」を伝えればよい。だが、そもそも小説を読むときに、作者の伝記や作品を取り巻く歴史性を背景にして読むことと、そのような歴史性から離れ、一つの自立した世界として普遍性をもとに読むことは、少なくない摩擦をはらんでいる。このことは後で見ると、作品への共感の質の違いや学生が作品から受け取るメッセージが異なるということに現れているように思われる。

そこで筆者は「セメント樽の中の手紙」を教材として扱う上で、このような「摩擦」に着目した授業を行った⁴。すでに教材について一定の知識のもとに読む教員や、また初出の「文芸戦線」で読む作品発表当時の読者と違い、学生の中にこの作品を初読時からプロレタリア文学として読むものはまずいないだろう。そうであるならば、プロレタリア文学であるということを教える前と後とで、学生は全く異なる解釈をすることが予想される。この点を利用して、異なる前提のもとに作品を読むことで解釈が変化するという体験をさせることが可能となる。つまり、学生が全く異なる視点をもとにした〈読み〉を体験するということである。このことは、須貝千里氏が述べる「ある視点から見えることが、別の視点に立った時どう見えるのかということ意識する力」(「偏見論—文学教育における〈虚構の時空〉—」(「日本文学」1986年1月)を育むことにつながることを期待される。

本稿は、「セメント樽の中の手紙」を素材として、異なる前提のもとで解釈の異なる〈読み〉を体験させることを目的として行った授業の実践報告と考察である。具体的には、まずはじめにこの作品がプロレタリア文学であるということを教えずに、作品のいくつかのポイントの

⁴ 米子工業高等専門学校2017年度後期、物質工学科1年「国語」、学生数40名

解釈を考えさせた後、今度はプロレタリア文学であること、その際、どのように読むべきかを教えた上で、同じポイントを読ませてみた。この授業のねらいは、「セメント樽の中の手紙」をプロレタリア文学として読ませるべきか否か、どちらがすぐれた解釈となるかを考えることではない。前提、つまり〈読み〉の枠組みの変化による解釈の差異を体験させること、そしてそこから自らの「読む」という行為を意識化させることが目的である。ただし、本稿は細かな授業報告ではなく、あくまでこの目的に沿った点をあげて論を進める。その際、学生の意見の選択はやや恣意的なものになってしまうだろう。具体的な学生の反応などは、最後に【資料】としてまとめているので参照してほしい。

授業の実施

授業全体の流れを示す。

1 読解の準備

- ①全体での音読 ②「初読時の感想」プリントを書く ③全体の話の流れの確認、漢字・語句の確認

2 前提なしでの読解

- ①それぞれの場面の解釈を学生が行う ②グループワークを通して班ごとで意見を話し合う ③発表を通してそれぞれの意見をクラス全体で共有する

3 プロレタリア文学の説明

- ①「セメント樽の中の手紙」の作者や初出時の時代背景の説明 ②プロレタリア文学の説明、〈プロレタリア文学のねらい〉を提示

4 プロレタリア文学としての読解

- ①〈プロレタリア文学のねらい〉をもとに再びそれぞれの場面の解釈を学生が行う ②グループワークを通して班ごとで意見を話し合う ③発表を通してそれぞれの意見をクラス全体で共有する

5 まとめ

- ①学習後のまとめ ②感想などをプリントに書く

最初にクラス全体で音読を行った。この時、最初の松戸与三（以下「松戸」と略記）の描写から手紙を読み始める前までを第一段、女工からの手紙が書かれている部分を第二段、松戸と家族とのやり取りの場面から最後までを第三段と全体を三段に分けた。その後、学生に初読時の印象に残った場面と疑問点、感想を書かせた。多くの学生が女工の手紙の中の、恋人の死ぬ場面の描写と女工の恋人への思いの切実さが強く印象に残ったようであ

った。この作品を興味深く、また印象強くしているのは、この二点であろう。一方で松戸の生活描写に注意を払うものは少なかった。また、解釈に関わる疑問点として次のようなものが挙げられていた。

- ・なぜ女工は仕事着の切れをあげたのか。（もらってもうれしくない）
- ・「あなたもご用心なさいませ」は何に対してなのか。
- ・なぜ「あなたが労働者だったら、お返事ください」と繰り返されているのか。
- ・なぜ「労働者なら」とこだわるのか。

これらは、『指導書』において、例えば「切れ」が「労働の象徴」と解説されるように、「労働者の連帯」という観点から読まれており、プロレタリア文学という知識が全くない学生にとっては解釈が難しいものであっただろう。他にも「手紙を読み終わった後の部分は必要なのか」、「第三段の意味がよく分からなかった」として、第二段の印象深さとの比較から、第一段・第三段をどのように捉えるべきか、疑問に感じている学生が多くいた。

次に、作品の解釈について、プロレタリア文学であるということを教える前と、プロレタリア文学であるということを教えた後、それぞれについて考察させた。両方の解釈が併記されるよう作業プリントを作成し、それぞれの解釈を行った後に比較しやすいようにした。ちなみに、学生たちは「世界史」などの授業でまだこれらの概念や歴史的な背景を学んでおらず、「プロレタリア」や「ブルジョア」などの言葉を知らなかったため、説明は最小限のものとした。授業の目的に必要な範囲内の知識を教え、それをもとに次のような単純化したねらいのもとで読むように指導した。

〈プロレタリア文学のねらい〉

- ・労働者の悲惨な状態を訴える。
- ・資本家階級への対抗意識を植え付ける。
- ・労働者の団結を促す。

先の青野の評論に触れた際に述べたとおり、要点を「階級意識」の問題として見ることを考え、『指導書』での読み方を参照しつつ、この三点にまとめ、これをもとに作品の解釈を考えさせた。[前提なし]が先の〈プロレタリア文学のねらい〉を教える前の学生の解釈であり、[プロレタリア文学として]が〈プロレタリア文学のねらい〉をもとに学生が考えた解釈である。

(1) 第一段 —松戸の労働描写—

まず、第一段の松戸の労働描写の読み方がどのように変化するかを見てみたい。

問 松戸与三のおかれている状況に対する表現は、何を意味していると考えられるか。

[前提なし]

- ・昔の人たちの暮らし。生活のつらさを表現。
- ・悲惨な社会。希望のない時代。
- ・人生のきびしさを伝えている。
- ・誰にでもあてはまるような、よいことがなくイライラしている状況を示している。

多くの学生にとって、松戸の描写は過去のものとして捉えられていた。また、松戸の状況の苦しさはあくまでも一般的な生活の苦しさとして読まれていたことがわかる。他にも、「手紙を読んだ後の気持ちの移り変わりを表現するため」といった物語の展開を考えた上での意見もあった。

一方、先の〈プロレタリア文学のねらい〉をもとにして読ませると次のような意見があった。

[プロレタリア文学として]

- ・労働者のやりきれない感情を表現している。
- ・労働者の置かれている状況がどれだけ酷いかということ。
- ・プロレタリアの象徴。
- ・松戸与三の印象が、ただの貧しい労働者ではなく、たくさんの労働者の中の一人という印象に変わり、「労働者」という立場により思考が傾く。

多くの学生が、「労働者」という視点で松戸を捉え始めた。特に、「プロレタリアの象徴」という意見は、重要なものであると言える。

この松戸に対するまなざしの変化は「セメント樽の中の手紙」を解釈する上で決定的な変化である。それは「与三の気持ちと重なる形で読者の心をゆさぶる力」（「教材としての」）という点に関わる。「プロレタリア文学」という前提なしで、学生たちが自らと松戸を重ねるとしたら、「松戸与三」を極めて抽象的かつ普遍的な人物として重ねることとなる。それはあたかも芥川龍之介『羅生門』の「下人」のような存在と言える。一般に授業において

『羅生門』の「下人」を失職した「労働者」として読むことがないように、「松戸与三」の過酷な労働、少ない賃金も、単に生活が苦しい人として読まれない。そのような姿勢においては、「苛酷な労働の実態や、そこから生まれる労働者の連帯」から、「現在の自分とのかかわり、またこれからどのように生きていこうと」（同）という問題を考えることはないと言える。

一方で、「プロレタリア文学」ということを前提にして読むならば、「松戸与三」という固有名をもった人物は、数多く世の中に存在する具体的な「労働者」の一人でありつつ、「労働者」階級の代表として捉えられ、その点から学生が気持ちを重ねることとなる。授業後の学生の感想の中に「自分は労働者でないので、プロレタリア文学として読むと理解できても共感できない」というものがあったが、これなどは松戸を「労働者」と見たために生まれたものであろう（くどいようだが『羅生門』の「下人」について、「自分は失職した労働者ではないから共感できない」と書くものがどれほどいるだろうか）。

つまり読書体験に「与三の気持ちと重なる形で読者の心をゆさぶる力」を見るなら、その「形」、共感の質が大きく変化するということである。この点は、最後に、この作品からどのようなメッセージを受け取ったかという点にその違いが表れてくる。

(2) 第二段 —女工の手紙について—

手紙の解釈のうち、大きな変化が見られた「劇場の廊下」や「大きな邸宅の塀」になってほしくないと言う女工の訴えを中心に考察する。

問 次のような言葉や行為は何を意味するものと考えられるか。

○「劇場の廊下」「大きな邸宅の塀」になってほしくない

[前提なし]

- ・自分の愛した恋人が人に踏まれたり、雨風にさらされたりしてほしくない。
- ・変わり果てた恋人を見たくない。
- ・恋人という素晴らしい人が、そんな地味なところで使われてほしくない。
- ・壊すときにまた砕かれてしまうから。

基本的に、女工の恋人に対する愛情の深さ、恋人を思う気持ちをもとに読みとられている。手紙の中の恋人の描写（「気性のしっかりした人」、「優しい、いい人」など）

も恋人への愛情と信頼を示すものとして捉えられ、また「切れ」を与える行為は、恋人を失った悲しみに対して、「共感」や「同情」を求めるものとして読まれていた。ただし、一部には「劇場や大きな邸宅にいる人は幸せでお金持ちだから、そんな人たちに恋人を見せつけるみたいになるのはいやだ」として、「お金持ち」という点に着目した意見もあった。

一方、プロレタリア文学を前提にすることで、先の部分は次のように変化した。

[プロレタリア文学として]

- ・劇場や大きな邸宅は資本家のものなので、そんな人たちに死後も恋人をとられたくない。
- ・資本家への対抗意識。

これらの意見は、恋人の死を、労働者と資本家の関係から捉え直したものと言える。恋人の描写についても、「資本家にとって労働者はどうでもいいもの。恋人は資本家の犠牲になってしまった」や、「境遇は惨めでも、人間的に素晴らしい労働者がいるということを伝えたい」というように、資本家に消費される労働者という観点からその意義を読みとっていた。

これらの変化は、恋人の死が単なる事故から、資本家による労働者の扱いを象徴的に示すものという解釈に変化したことを意味する。このことは、最後の「あなたも御用心なさいませ」の解釈にも表れている。

問 「あなたも御用心なさいませ」に込められた思いはどのようなものか。

[前提なし]

- ・恋人と同じようなことにならず、良い人生を送ってほしい。
- ・どんな人でもだれかに愛されており、もし死ぬようなことがあれば周りの人が悲しむため、注意として。
- ・大切な人がいつ死ぬかわからないし、自分もいつ死ぬかわからないので、一日一日を大切にしてほしい。

[プロレタリア文学として]

- ・このままの状態であれば、同じことが繰り返されてしまう。
- ・今不満を飲み込んでしまっているあなたも恋人と同じ立場ということを伝えなかった。

[前提なし] では、恋人の死はあくまでも「いつ死ぬかわからない」という、「偶然」によるものとされる。そ

のため、「良い人生を送ってほしい」や「一日一日を大切にしてほしい」という解釈となる。一方で、前述のような階級意識をもとに読むならば、「このままの状態であれば、同じことが繰り返されてしまう」という、資本家による労働者の圧迫の中での「必然」の出来事、資本家が労働者を消費する一つのエピソードとして読まれることとなる。

このような変化は、「セメント樽の中の手紙」を「言葉の力を学ばせるために有効な教材」（「解説」とする観点に関わるものである。その力が「この手紙の中では女工の愛は本物なのであり、少なくともそのように読み手には捕らえられるものである」（同）として手紙の中の「女工の愛」に支えられているならば、「プロレタリア文学」という情報はノイズになる恐れがある。女工の手紙をアジビラのようなものとする見解もあり、実際に学生の中にも「資本家＝悪と一方的に押しつけられている気がした」という意見もあった。また女工の手紙について、「プロレタリア文学として読むと、そのような要素がありすぎて、くどい感じがする」、「プロレタリア文学として読むと恋人の存在が薄れて資本家の方に注目してしまう」とする意見もあった。

(3) 第三段 —松戸がお腹を見る場面—、まとめ

第三段の最後の場面となる、松戸が細君の腹を見るものがどのように解釈されたのか、確認する。

問 細君の腹を見る松戸与三からどのような思いが読み取れるか。

[前提なし]

- ・自らの子供を立派に育てていこうという使命感が生まれてきた。
- ・手紙を読み、命の大切さを知り、子供を大事にしようと思った。
- ・家族の大切さを感じた。

最後の場面において、多くの学生に読まれたのは「生命の大切さ」、「家族の大切さ」であった。これは、女工の手紙が「恋人への愛」という観点から読まれたことに対応している。女工の愛情が、第一段で子供や家族を邪魔者扱いしていた松戸に伝わり、家族の大切さ、生命の大切さに気づいた話として読まれたことを意味する。

一方、「プロレタリア文学」として読まれると、次のように解釈が変わった。

[プロレタリア文学として]

- ・子供に同じような思いをさせたくないで、自分が世の中を変えてみせる。
- ・子供が大きくなるころには、今の世の中が変わってほしい。
- ・子供のことがあるから、行動を起こすことは難しい
- ・もし自分がくびになったら、子供を育てられない。どうしようもない思い。

最後の場面を、変革への決意と見るか、迷いと見るかは、「セメント樽の中の手紙」の研究史においても見解が分かれてきたところである。だが、両者ともに、労働者の連帯、資本家と労働者の関係性という観点から読まれていることに変わりはない。そしてこの場面の解釈は、次の、作品から受け取るメッセージのとらえ方にそのままつながるものである。

問 この小説から、どのようなメッセージが受け取れるか。あなたの考えを書きなさい。

[前提なし]

- ・命の大切さをしてほしい。
- ・いつ、どこで、何が起こるのか誰も分からないが、自分と同じ立場の人はいて、一人ではないということ。
- ・自分が死んだ後に残された人たちの気持ちを考えて毎日を送ってほしい。自分の命は自分だけのものではない。
- ・苦しい立場であっても、何かを守りたいなど、自分にとって大切なもののために生きていくことが大事。
- ・日々の生活の中で何が起こるかわからないから、一日一日を大切にすべきだ。

[プロレタリア文学として]

- ・資本家は自己の利益しか考えてなく、労働者の環境がいかに劣悪かということ。
- ・くどいくらい今の社会の労働関係を変えようというメッセージがある。
- ・このままの状況なら死ぬ恐れがあり、困るのは家族だから、「団結」することが大切です。
- ・労働者は悪くない。悪いのは資本家である。

注目すべきは、作品の捉え方が全く異なるものに変化したことである。そしてそれぞれのメッセージはこれまで見てきたような細部の解釈によって支えられている。後者については、作品を〈プロレタリア文学のねらい〉

を体現したものとして捉えていると言える。細かな解釈も見てきた通り、そのねらいをもとにしている。考えたものの前者である。「命の大切さ」や「家族の大切さ」を読み取る上で、松戸の「労働者」という設定は意味をなさない。松戸の状況は一般的な「苦しい立場」として読まれている。また、「いつ、どこで、何が起こるのかは誰も分からない」という読みは、事故を「偶然」の出来事とする考えに支えられている。事故を資本家による労働者の圧迫の一つの事例として見るならば「命の大切さ」というテーマは前景化されることはない。また、「残された人たちの気持ち」を重視する読み方も、女工の手紙から恋人への思いを中にして読み取ることで生まれるものである。

つまり学生たちの〈読み〉が全く変わってしまったことを意味する。これは、ちょうどだまし絵「ルビンの壺」を「顔」として見るときと「壺」として見るときでは、細部の意味するものが全く違うものになることに似ている。学生たちは、同一の作品を全く異なるものとして読んだと言える。

ところで、前者のような〈読み〉を誤読と片付けるわけにはいかないだろう。また、「労働者の立場」を読み取らないからと言って、「読みの浅さ」（「セメント樽の中の手紙」の教材化）と捉えてよいものであろうか。例えば、「日々の生活の中で何が起こるかわからないから、一日一日を大切にすべきだ」というメッセージは、次の意見と比べるとき、どのように感じられるだろうか。

まずはこの主人公の「生きよう」という意志と、困難にもみずからぶつかる姿勢を銜うことなく読みとり、自分の人生を、生活を、正面から見据えるよすがにししてほしいと思う。（「鑑賞」（佐藤元紀・堀内雅人 担当、『高等学校 国語総合 指導書 現代文編Ⅱ』明治書院、2003年発行教科書対応版、217頁）

これは別の出版社のものであるが、『国語総合』の教科書に載る太宰治『富嶽百景』の指導書の一部である。定番教材の一つでもある『富嶽百景』が、なぜ教科書に収録されているのかは十分に調査が出来ていないが、その理由に先のような「生きよう」という意志、前向きな姿勢を読みとることがあると思われる。「一日一日を大切にすべき」という意見、またその他「命の大切さ」、「自分の命は自分だけのものではない」という視点から作品を読んでいくことを果たして浅い読みと断言できるだろうか。

その一方で、細部においてプロレタリア文学という観

点抜きにはうまく読めない点が存在することも確かである。実際、学生の意見として、「プロレタリア文学として読むと、細かなところまで意味がわかった気がする」、「プロレタリア文学として読むと前提なしで読んだときの、何か足りない感じが補われ、ピースがはまるような満足感を感じた」というものがあった。一方で「自分は労働者でないので、プロレタリア文学として読むと理解できても共感できない」、「型にはめられた感じがする」と感じる学生もいるようである。

本作品を授業で扱う上で、解釈の変化による共感の質の違いには注意が必要であろう。

まとめ

学生に前提の有無、どちらでの読み方がおもしろいかということを知ると、その他や未提出を除き、[前提なし] 14人、[プロレタリア文学として] 18人と、ほぼ拮抗した数字となった。

さて、最初にも述べたとおり本授業の主題は、「セメント樽の中の手紙」をプロレタリア文学として読むべきか否かではない。両者の〈読み〉の差異の体験、前提によって解釈が大きく変化することを体験することである。実際、本授業を行った後で感想を書いてもらうとおおむね、作品の解釈が変わったということに強い興味を感じていた。

- ・同じ話でも前もって異なる前提を持つことで、様々な解釈ができるということを知って、奥が深いと感じた。
- ・異なる前提で読むことで読みとる内容や筆者の考えが大きく変わるのすごくおもしろかった。

多くの学生は、同じ作品の解釈が、前提、つまり〈読み〉の枠組みの変化によって大きく変わることに興味を持つとともに、その体験に新鮮さを感じていた。その中でも次のような感想は、学習効果として実りのあるものと思われる。

- ・普段、自分が小説を読むとき、自分のイメージや前提があることを実感した。
- ・前提の有無で読みが大きく変わり、私たちは無意識のうちに、それぞれの本に対する態度を変えているということを体験できた。
- ・様々な視点で見ることができるようになりたい。

これらの意見は、プロレタリア文学という観点で読むとき大きく解釈が限定されることから、[前提なし]で読んだ時も同様に、自らが無意識のうちに何かを「前提」にして読んでいることに気づいたことを示している。授業の最後に、この点をもとに自らの解釈の根底にある価値観を考えると、「読む」という行為を意識化することを説明した。重要なのは、[前提なし]に読んでいると考えている時に、実は無意識のうちに、ある「フィルター」、つまり〈読み〉の枠組みを通して読んでいることに気づくことである。そしてこの「フィルター」は自らのもつ価値観を体現したものである。

この気づきは、「読者論」的な視点につながる。学生はしばしば小説を読む上で「作者の意図」、作者が何を言いたいのかということを考える。このような考え方は大切であるが、一方で「読者」が意味を生成しているという見方も重要である。私たちは、作品を読む上で必ず自らが持っている「フィルター」を通して意味を生成している。あたかも「セメント樽の中の手紙」を、「プロレタリア文学」という「フィルター」を通して、「労働者の連帯」という意味を読み取る（生成する）ように。同様に、例え前提なしで読んでいるつもりでも、学生はこれまで培ってきた価値観や倫理観という「フィルター」を通して作品から「命の大切さ」などの意味を読みとって（生成して）いるのである。この「フィルター」の存在に気づくことが、今後の小説の読み方や、広くは自らの物事のとらえ方を見直す上で大きな意義をもつだろう。

「セメント樽の中の手紙」は、学生に異なる解釈の〈読み〉を体験させ、自らの「読む」という行為を意識化させる上で、極めて扱いやすい教材だと言える。このことは、学生が自らのものの見方や考え方を点検する機会となるだろう。読み方の多様性を意識させるということは、多様な価値観が強調される今日の教育現場、社会において重要な意味をもつものと言える。

【資料】

学生が書いた意見のうち、主なものを羅列する。似たような意見は省いている。また、語句や文章など、文意の変わらない範囲で修正を施している。

1 「初読時の感想」プリント

(1) 特に印象に残ったところはどこか。

- ・女工の恋人がクラッシュに砕かれていくところ。
- ・女工の手紙の中の恋人への思い。
- ・松戸が最後に細君の腹を見たところ。
- ・女工の手紙に時折本音でないものが混じっているような気がした。
- ・手紙の中に「！」を使っているところ。
- ・セメントあけの仕事は鼻の掃除がで

きないほど忙しいというところが印象に残った。

(2) 疑問点を書け。

・第一段、第二段、第三段の関係性・手紙の中で、劇場や廊下になったりするのはいじめだと言った後に、どんな所でもつかってほしいとコロコロ変わっているのはなぜか。・なぜ女工は仕事着の切れをあげたのか。

(もらってもうれしくない)・「あなたもご用心なさいませ」は何に対してなのか。・なぜ女工はセメントになった恋人の行方をしりたがっているのか。・「経帷子」とはどのようなものなのか。・「クラッシャー」はどのようなものなのか。・なぜ「あなたが労働者だったら、お返事ください」と繰り返されているのか。・なぜ女工は手紙を読んだ人の名前を知りたがったのか。・松戸の心情がよくわからなかった。(子供を作ったのは自分だし、手紙を読んだ後の発言もよくわからない)・なぜ紙を小箱に入れたのか。・人の入ったセメントなど、本当に使うのか。・なぜ知らない人に手紙を書いたのか。・なぜ「労働者なら」とこだわるのか。・手紙を読み終わった後の部分は必要なのか。・第三段の意味がよく分からなかった。

(3) 感想を自由に書け。

・細君の子供は女工の恋人の生まれ変わりなのか。・セメントあけは大変な仕事だと思った。・女工の恋人への執着が少し怖かった。・グロテスクなシーンや鼻の穴などの汚い表現が気になった。・クラッシャーで本当に人が全身砕かれるものなのか疑問に思い、そこからこの女工の話は本当に事故なのだろうかと思った。・暗い気分になった。・最初の方は一生懸命仕事をがんばっているように感じた。・女工が切れをあげたのは、きっと精神的に病んでいたからだろう。・女工の手紙の内容は二転三転している。・女工が二重人格に感じた。・作者はなぜこの作品を作ったのか。・松戸が手紙を読んで、残された人の気持ちを考えていて感動した。・毎日似たようなことをしていても、何かが起こっていつ死が訪れるかわからない。だから一日一日を大切にしよう。・授業で扱っていい教材なのだろうか、と思った。

2 解釈の変化

第一段

(1) 松戸与三のおかれている状況に対する表現は、何を意味していると考えられるか。

[前提なし]

・昔の人たちの暮らし。生活のつらさを表現。・自分自身に対するふがいなさを感じている。・筆者が松戸与三と同じような立場だったのでは。・悲惨な社会。希望のない時代。・そのような状況から抜け出したい。・人生

のきびしさを伝えている。・主人公の仕事がとても過酷で、家族もいてより大変である様子。・誰にでもあてはまるような、よいことがなくイライラしている状況を示している。・手紙を読んだ後の気持ちの移り変わりを表現するため。・これからの展開によって変わる可能性のある、不満な気持ち。・後の女工の恋人との対比で、家族を愛せないという点を強調している。・後半で家族が存在するありがたみを示すため。・女工の手紙に「労働者ならお返事をください」とあり、その労働者の苦しみを描くことによって、女工のさみしさやつらさを際立たせている。

[プロレタリア文学として]

・「労働者」という立場での仕事が過酷であること。・労働者のやりきれない感情を表現している。・労働者の置かれている状況がどれだけ酷いかということ。・プロレタリアの象徴。・松戸与三の印象が、ただの貧しい労働者ではなく、たくさんの労働者の中の一人という印象に変わり、「労働者」という立場により思考が傾く。

第二段

(1) 女工の恋人への思いからどのようなことが読み取れるか。

[前提なし]

・恋人への深い愛情。・恋人を信頼している。・恋人の人間性を誇りに思っている。・優しくていい人であった恋人が、なぜこんな目にあわなければならなかったのかと悲しむ気持ち。

[プロレタリア文学として]

・資本家にとって労働者はどうでもいいもの。恋人は資本家の犠牲になってしまった。・恋人がクラッシャーで砕かれて死んだが、作業が止まらなかったことから、労働者の変わりはいくらでもいる。・境遇は惨めでも、人間的に素晴らしい労働者がいるということを伝えたい。・誇らしく、そして深く愛していた人の命よりも、労働の効率が重視されたことへの怒り。

(2) 次のような言葉や行為は何を意味するものと考えられるか。

①「劇場の廊下」「大きな邸宅の塀」になってほしくない。

[前提なし]

・自分の愛した恋人が人に踏まれたり、雨風にさらされたりしてほしくない。・劇場や大きな邸宅にいる人は幸せでお金持ちだから、そんな人たちに恋人を見せつけるみたいになるのはいやだ。・変わり果てた恋人を見たくない。・恋人という素晴らしい人が、そんな地味なところで使われてほしくない。・壊すときにまた砕かれてしまうから。

[プロレタリア文学として]

・死んだ後も資本家たちに間接的に働かされているようにいやだ。・彼を殺したも同然の資本家のところに恋人がいてほしくない。・劇場や大きな邸宅は資本家のものなので、そんな人たちに死後も恋人をとられたくない。・資本家への対抗意識。

②「恋人の仕事着の切れ」を与える。

[前提なし]

・他人ではあるが、同じ労働者に「切れ」を渡すことで、恋人のかわりに生き続けてほしいと願っている。・悲しみを一緒に味わってほしい。・実際にあったできごとであること印象付けるため。・事故により亡くなった人がいることを忘れないでほしい。

[プロレタリア文学として]

・労働者としての仲間意識。・労働者は一生懸命働いても、これしか残らない。・労働者にとって大切なものだから。・大切にしているものをあげることで、労働者の団結を促している。・労働者の人に、恋人の思いを受け継いでほしい。

(3) なぜ「労働者」にこだわるのか。

[前提なし]

・自分と同じように辛いことや苦しいことがあった人に共感してほしいから。・セメントを使った場所を正確に理解できるから。・恋人と同じ境遇の人に自分の気持ちを理解してほしいし、理解されると思ったから。

[プロレタリア文学として]

・資本家と立ち向かうために、自分と同じ立場の人と共有したいから。・同じように資本家に怒りを覚えるなら、協力して資本家に対抗してほしい。・労働者なら、自分に共感して、団結してくれると思ったから。・そもそも小説自体が労働者に向けて書かれているから。

(4)「あなたも御用心なさいませ」に込められた思いはどのようなものか。

[前提なし]

・恋人と同じようなことにならず、良い人生を送ってほしい。・どんな人でもだれかに愛されており、もし死ぬようなことがあれば周りの人が悲しむため、注意として。・いきなり死んで大切な人たちを悲しませないように、という用心。・恋人と同じようなことになるのを心配している。・事故には気を付けてほしい。大切な人がいつ死ぬかわからないし、自分もいつ死ぬかわからないので、一日一日を大切にしてほしい。

[プロレタリア文学として]

・資本家に酷使されて、恋人のようにならないよう

に。・「御用心なさいませ」は資本家には気をつけろということ。・このままの状態であれば、同じことが繰り返されてしまう。・今不満を飲み込んでしまっているあなたも恋人と同じ立場ということ伝えたかった。

第三段

(1) 手紙を読んだ後の「何もかもぶち壊してみてえなあ」とは、どのような思いか。

[前提なし]

・一人でもつらい、苦しい、悲しいと思うこの世の中を本当につぶしたいと思った。・思い通りにいかない世界をぶち壊したくなった。・女工の手紙から、重たいものを背負わされたような気がしたので、楽になりたいかった。・周囲のセメント製のものが、気持ち悪くなった。・手紙によって、自らの平凡な不幸なんてどうでもよくなった。

[プロレタリア文学として]

・資本家が上にいる世界を壊して、自由になりたい。・資本家と労働者の関係性を破壊したい。・今は一人なので、口で言うのが限界。・女工に同情し、資本家への対抗意識が生まれた。

(2) 細君の腹を見る松戸与三からどのような思いが読み取れるか。

[前提なし]

・自らの子供を立派に育てていこうという使命感が生まれてきた。・手紙を読み、命の大切さを知り、子供を大事にしようと思った。・家族の大切さを感じた。・消えていく命もあれば、生まれてくる命もある、というように「命」について考えたのでは。

[プロレタリア文学として]

・子供に同じような思いをさせたくないで、自分が世の中を変えてみせる。・子供が大きくなるころには、今の世の中が変わってほしい。・行動をおこすことへの不安。・子供のことがあるから、行動を起こすことは難しい。・もし自分がくびになったら、子供を育てられない。どうしようもない思い。

まとめ

○この小説から、どのようなメッセージが受け取れるか。

[前提なし]

・与三は子供を嫌っていたが、女工は恋人を愛しているという対比から、周りに異なる考え方、感じ方があり、お互いを知り合うことで共感できるということ。・命の大切さをしってほしい。・いつ、どこで、何が起こるのかは誰も分からないが、自分と同じ立場の人はいて、一人ではないということ。・死んでも生まれても幸せになれない不幸な時代。・自分が死んだ後に残された

人たちの気持ちを考えて毎日を送ってほしい。自分の命は自分だけのものではない。・苦しい立場であっても、何かを守りたいなど、自分にとって大切なもののために生きていくことが大事。・世の中は不条理だらけ。それは生まれ持ったものであるがゆえにやりきれない。・人間いつ死ぬかわからないが、相手がたとえ死んでも愛は不滅である。・日々の生活の中で何が起こるかかわからないから、一日一日を大切にすべきだ。

[プロレタリア文学として]

・女工の手紙は、恋人への愛情よりも資本家への怒りが強い気がした。・資本家は自己の利益しか考えてなく、労働者の環境がいかに劣悪かということ。・昔の資本主義の社会における、労働者のつらさ、資本家の利己主義な様子がよく伝わった。・くどいくらい今の社会の労働関係を変えようというメッセージがある。・このままの状況なら死ぬ恐れがあり、困るのは家族だから、「団結」することが大切です。・労働者は悪くない。悪いのは資本家である。・松戸は思いとどまったが、読者ぜひ社会を変えるために立ち上がってほしい。・昔の労働者と資本家の立場の違いに驚いた。今の時代は昔ほどひどくはなくても、似たようなことがあると思う。そのとき、団結して改善されていく世の中にしようというメッセージが受け取れる。・「労働者と資本家」みたいに分けられるのではなく、みんなが平等に幸せな世の中になってほしい。・「労働者と資本家」の関係など、今の自分にはわからないところがあったが、当時の人には共感できる場所が多かったのだと思う。

3 授業後の感想

(1) [前提なし]で読むのと[プロレタリア文学として]読むのとでは、どちらがおもしろく感じたか。

[前提なしで読む] 14名

・解釈の幅が広く、様々な考え方ができるから。・プロレタリア文学として読むとつらく暗い気持ちになった。・多くの謎が残されるので、より深く読みたくなった。・プロレタリア文学として読むと、そのような要素がありすぎて、くどい感じがする。・前提なしで読むと、女工の手紙の意味を様々な考えられるが、プロレタリア文学として読むと型にはめられた感じがする。・プロレタリア文学として読むとあまりにもストレートに表現されすぎている感じがしておもしろくない。・プロレタリア文学として読むと恋人の存在が薄れて資本家の方に注目してしまう。・自分は労働者でないので、プロレタリア文学として読むと理解できても共感できない。・前提なしで読んだ方が、この話の続きが気になるが、プロレタリア文学として読むと続きが気にならな

くなる。・文章を様々な視点から読むことができるから。・先入観がない方が、好きに想像できるのでおもしろかった。・プロレタリア文学として読むと資本家=悪と一方的に押しつけられている気がした。

[プロレタリア文学として] 18名

・作者に思いが深く読みとれた気がした。・前提なしだと、何となく気持ちのよくない話だと感じるが、プロレタリア文学として読むと、労働者の立場などがよく伝わってくる。・労働者にとって良い環境はどうあるべきかなど、社会とのつながりが明確になる。・プロレタリア文学として読むと、細かなところまで意味がわかった気がする。・前提なしで読むと、話の内容がよくわからず、ただ悲しい話という感じだったが、プロレタリア文学として読むと内容がよくわかった。・プロレタリア文学として読むと前提なしで読んだときの、何か足りない感じが補われ、ピースがはまるような満足感を感じた。・この時代の背景が頭に入ってきてやすかった。・正直、前提なしで読むと、意味がさっぱりわからなかった。・プロレタリア文学として読むことで、立体的で奥深い文章で、一つ一つの意味を考えることができ、おもしろかった。・プロレタリア文学として読むほうが、今の社会とのつながりがはっきりわかった。

[その他] 5名

・正直、どちらもおもしろくなかった。自分が労働者でないということもあったのかもしれない。・どちらもおもしろかった。・読み比べたことがおもしろかった。・両方を考えて読むことがおもしろかった。・プロレタリア文学として読む方が意図がよくわかるが、おもしろいとは思わない。

(2) 授業の感想を書け。

・異なる前提で読むことで読みとる内容や筆者の考えが大きく変わるのでごくおもしろかった。・同じ話でも前もって異なる前提を持つことで、様々な解釈ができるということを知って、奥が深いと感じた。・前提なしだと、文章の意味がなかなか理解できないところがあったが、解釈の種類が多かった。前提ありで読むと、文章の意味は理解できたが、解釈の幅が狭くなった。・これから小説を読むときは、前提を気にしながら読んでみたいと思った。・違った視点、条件を与えることで、人それぞれ変わった見方ができる。・型にとらわれている気がした。・普段、自分が小説を読むとき、自分のイメージや前提があることを実感した。・様々な視点で見ることができるようになりたい。・前提を知らずに読むと女工と恋人が中心に見えるが、前提を知ってから読むと、労働者と資本家が中心に見ることができた。・前

提があると、何となく予想できておもしろくなかった。・他の小説でも、前提を変えることでどのように変わるのか、試したいと思った。・前提の有無で読みが大きく変わり、私たちは無意識のうちに、それぞれの本に対する態度を変えているということを体験できた。